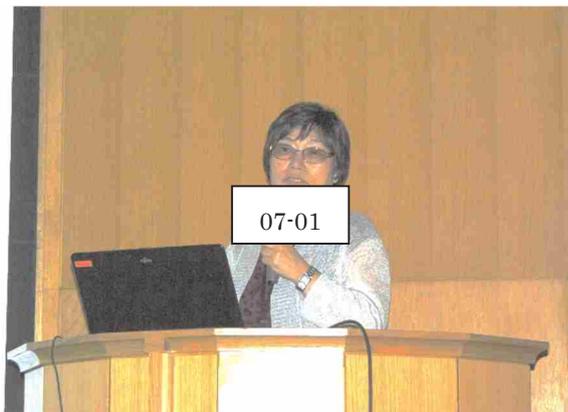


口頭発表「小学校での動物飼育体制と飼育題材の作文について」

中川 美穂子



1 はじめに

小学生への動物飼育の影響について調査する場合、飼育の条件、つまり学校の飼育のあり方を考慮することが重要である。小学校の動物飼育の方式には、主に高学年から選ばれた委員たちが世話をを行う「特別活動に位置付けられている委員会活動方式」（委員会方式）と、飼育体験活動を総合の学習の時間等の教科に位置づけて学年全員が年間を通じて世話をする「授業として行われる学年飼育方式」（学年方式）がある。学年方式では、低学年の生活科、あるいは中学年の総合の学習の時間として行われている。両方式について、すでに著者等は学年方式の飼育だと委員会方式の飼育などに比べ、学年の進行に応じて向社会性得点が改善するとか、学校適応性が減少しない、また動物に共感を持つことで友達との関係も良好になるなどといった報告^{*1}をしている。

著者は、平成16年度から9年間、東京都獣医師会理事として、同会の学校飼育動物モデル校事業の動物飼育作文コンクールに関わり、毎年約10校からの応募作文100編、合計900編近い作文を読んできた。これら各学校が選んで応募してきた作文の内容には、毎年学校ごとの特色というか明確な差異が認められ、毎年繰り返される傾向が強かった。審査員の評価の高い作文の内容からは、動物の世話を通じて、特定の動物に心をかけ、始めは汚くて嫌だった清掃も、清掃後の飼育舎で餌を食べる動物達を見て、

友だちと喜びあう様子が伝わってきた。一方評価が低かった作文には、目の前の動物の印象が薄いのか、単に掃除の仕方を順序だてて記述するのみで、動物の名前も、あるいは動物そのものも記述されていない作文が多く見られた。以下に作文例を示す。

2 飼育方式による作文例（東京都「動物飼育作文コンクール」作文集から）

(1) 委員会方式の作文例

（中学受験のため越境者が多い小学校が選んだ飼育委員の応募作文例）

①「どうぶつ」 6年（飼育委員）・・・10編の応募作文の平均字数 650文字

昨日僕の学校に移動動物園が来ました。正直いって僕はマンションに住んでいるせいか動物とふれ合う機会がありません。「見る」ということはありますが「ふれ合う」といった事は幼稚園の移動動物園以来の気がします。僕は最近動物の病気がはやっているので動物にあまり近づきたくないと思っていました。しかし昨日短時間でしたが動物とふれ合うことになりました。そしてウサギをだこうとしたりヒヨコを見たりしました。すると不思議なことに心がだんだんと和みヒヨコの目などの可愛らしさにひさしぶりに気付いたのです。このような事は時々あります。例えば祖父母の家に遊びに行った時そこで飼育している金魚を観察したり、えさをあげたりします。すると金魚の意外な一面（この金魚は目のあたりにほくろのようなものがあるとか、腹を上にもむけて泳ぐなど）を発見し妙に親近感をもったりしてしまうのです。他にも学校で亀を飼っているのですが僕にはいつも同じ事をしている生き物にしか見えませんでした。しかし秋になり冬に近づくにつれて、まるで寒さをしのぐかのように、せっかくの箱庭風の石をかたむけ、その下にもぐりこむことが増えてきていることを発見し、「亀も亀なりにがんばっているなあ」と感じ亀が愛らしく

見えてきました。

この様に動物は人間の心を豊かにしてくれると思います。また人間もそれを必要としていると思います。人間は科学の発展のためにずいぶん動物を犠牲にしてきました。ですから動物が病気をもっていても犠牲にしてきた動物を今こそ科学の力で保護していくべきだと思います。

②無題 6年

ぼくは、もともとかわいい動物をさわってみたりすることが好きでした。だから今日はいろんな動物をさわられると聞くととてもうれしかったのです。そしてその動物たちはかわいい動物たちばかりでした。そこでぼくは感じたことがあります。それは何かというと今まで動物をさわる時は1種類ばかりだったけど、今回はいろんな動物をさわったことにより、全ての動物達の1コの命の重さはすべて等しいということです。つまり全ての生物は差別されることはないということです。

ぼくはこの考えにより動物たちがもっとすきになってしまいました。ぼくが今日さわった中で一番好きだった動物はヒヨコです。なぜかという小さいので赤ちゃんみたいであるというイメージをもっていたからです。ぼくは今飼育係をたんとしています。ぼくは今回の移動動物園でいろんな動物をさわったことにより飼育係としての志というものがかわってきたような気がしてきました。ぼくは最高学年としてこの気持ちを5年生たちにめいっぱい伝えたいです。話がもどるのですが動物が好きなのは動物たちとたわむれていると何か心がいやされるような気がするのです。ぼくは動物にはこんなような力があるんだなと思いがしてしまいました。この動物にいやされる気持ちも5年生たちに伝えていきたいと思います。

(2) 学年飼育方式の作文例

4年の総合の学習に位置づけた学校が選んだ作文例10編の平均字数1350文字、

(チャボの死後4ヶ月経過してかかれています)

す)

①悲しかったけど頑張った飼育 4年 男子

ぼくは、飼育をやり始めた時は、「飼育って、面白いかな」なんてことを考えていたり、「戦わせられるかなあ」なんてとんでもないことを考えていました。本当に最初のころは、「つかれないかな」とか、思っていたもんだからうかつに餌もあげられなかったです。それに、まだそうじとかの細かいやり方も分からなかったから、むずかしくてたまらなかったです。

そして、ぼくがだんだんなれてきたころに、前から具合が悪かったチャボのシルフィーがたおれました。その時は国語の時間で、それを副校長先生が見つけたそうです。ぼくはその時、別の場所で別の事をしていて、池尾先生に教えてもらうまで全然気付かなくて、「えっ本当」という気持ちで教室に行きました。教室についてみると、みんなしいんとしていて、

「シルフィーがんばれ」と応援したけど、シルフィーは息も少ししかしていなくて、今にも死にそうでした。でもぼくたちは、ただいのるしか出来なくてほかに何も出来なくて、とても悲しくて、きんちょうして、しかも歯がゆかったです。そして、夫のイエローを連れて来てあまりこう果がなくて、ようやくじゅう医の先生が来て、お水を飲ませたり、砂とう水を飲ませたりしました。結局、じゅう医の先生が動物病院に連れて帰りました。その日は「シルフィーは大丈夫かな」と、考えていてなかなかねむれませんでした。

次の日の朝ちょっと心配しながら学校に行った。そして二時間目あたりに副校長先生が、「シルフィーが元気になりましたよ」

と、言いに来ました。ぼくはその言葉で思わず飛び上がりました。その時は心そこうれしかったです。その日中は、もううれしくてたまらませんでした。

でも、それから数日後、とても悲しいお知らせが入りました。なんとシルフィーの病気が悪化し、シルフィーが亡くなったのです。そのこ

とを聞いた時は、悲しさのあまり、ただぼうぜんとして、約十秒後ぐらいにはっとしました。「シルフィーは苦しみにたえながら良くがんばった」とか、「なんでシルフィーは今までずっとがまんしたんだろう。そうか、ぼくたちや家族に希望をあたえてくれていたんだ。ありがとう」そんなことがぼくの脳をよぎります。そして、獣医さんは、「君たちのせいじゃないよ」と、言ってくれたのでとてもうれしかったです。そして、シルフィーがなっていた病気は人間の病気で言うと、はいがんだったそうです。ぼくはそんな病気にシルフィーはなっていたんだな、と思いました。そして、そのシルフィーのはいの写真を見てると、なんと白いできものが沢山できていて、はいの周りをおおっていました。そして、シルフィーのレントゲン写真を見てみるとほとんど空間がなくて、これじゃあ息をするのも大変だな、と思いました。そして、死んだシルフィーの胃ぶくろ辺りをさわると、何も入っていませんでした。多分だけど、息をするのでせい一杯でエサを食べるのも大変だったんだと思います。

今は、シルフィーやウサギのラバが亡くなった事もあり、エサの量や水の量、掃除の仕方や体調チェックに気を使っています。最初のころとくらべてはるかに動物達にもなれ、好きなエサなど分からなかった事が分かって来て、そしてそれを人に伝えられるようになりました。そして、何よりも変わったのが動物に対する気持ちです。最初はきょうみ本位でやっていたのが、今では「もう絶対これ以上他の子達をなくならせないぞ」とか、「責任を持ってやるぞ」という気持ちに変わっています。これからも飼育を頑張りたいです。

②「命」を見ること 同校 4年 女子

4年生になって飼育が始まった時、きっとかん単にできるようになると思いました。鳥と熱帯魚を飼ったことがあったし、おばあちゃんの家には、年をとった犬がいたから白内障になったり、その他の病気になったときの様子も見て

いたからです。また、犬が死んでしまった時のことも覚えていましたから。

でもそれは「見た」だけだったのです。看病したり世話をしたのはおじいちゃんやおばあちゃんやお母さんだったのです。鳥が死んでしまった時、お母さんはスポイトで水を飲ませて手の中であたためていました。私はそれをドキドキしながら見ていました。

それでは学校の飼育ではどうでしょう。自分がさわって、世話をして体の具合に気をつけて鳥やウサギの病気に気づいてあげなくちゃいけません。目が見えないとすごくこわがりになることがわかりました。わかるのは音とにおいだけだから、動物がこわがる音や声は出さないようにしてあげたいと思いました。今でも、シルフィーやラバがびくびくしていたのを思い出します。人間は怖い時には誰かのそばにくっついたりするけれど、動物もそういうことをすることがあります。したくてもそこに家族がいないことの方が多くて、ウサギなどはかわいそうだと思いました。

一年生に動物とのふれあいを教えている時、とても怖がっている女の子がいました。体がかたまって動きませんでした。

「大丈夫だよ」としか言ってあげられなかったけれど、「動物の方がこわがっているから、急に羽をバタバタしたり、ウサギもビューンと走り始めたりするんだよ。やさしくしてあげれば大じょうぶ」

と、言ってあげれば良かったと思いました。私も最初はチャボを持ってませんでした。やっと持てた時はふわっとあたたかくて、思ったより軽くて少しこわいと思っていたチャボの顔がかわいく見えました。

やっぱり自分がさわって自分が責任を持つと、だんだんかわいいと思う気持ちや、思い出して気になったり心配したりする気持ちがわくなあと思いました。

ただ見るだけでなく自分たちで飼育をする時、「命」をみているんだという気がして、こ

んなふうにもいろいろと動物の気持ちがわかってきました。家で動物を飼う時はもっと私もやらなくちゃと思います。でもそう言う気持ちが強くなると、病気になったり死んだりしたときすごく悲しくなりそうだなあと思います。

一年生がああ授業のあと、チャボの絵を書きました。ふるえて動けなくて下を向いていた子は、きっとほとんど見ていなかっただろうなと思っていました。でも絵を見てびっくりしました。色も形もチャボそっくりでした。いつも飼育をしている私だってこんなに本物と同じにかけると、あまり自信はありません。私だったら、怖かったりあまり興味がない物は、ついつい見逃してしまいますが、こわくても観察する力がその子にはあるんだなあと思いました。

「命を見ると言うことはとても幸せを感じるものだけど、その命の重さはとても大きくて、ずっとつづくと思ってた命が消えてしまう時の悲しみはとても大きい。『命』を見ると言うことは喜びも悲しみも味わったと言うことだと思いました。

3 飼育体制による作文の違いの分析

以上のような動物飼育の児童作文を得て、4年生から6年生までの児童の学校動物飼育へのとらえ方について、作文自体を比較分析調査した。結果、学校の飼育体制によって、作文の字数が異なり、文章構成力や感情表現力にも有意さが確認された。つまり4学年の教科に位置づけた教育としての飼育活動を行っている学校の児童の作文(94編)が飼育委員会の子達の作文(97編)より字数も有意に多く、評価も高かったのである*2。なお、この分析研究で感情表現力の評価観点7項目(表1)を新たに設けた。これらは尺度としての信頼性が確認されているので、今後、活用されたい。

表1) 評価観点

学習指導要領「文章の書き方」より作文構成力の評価観点(梶井の分類(2001))

- ① 描きたいことが整理されている。
- ② 行動や事柄の順序、場面の移り変わりの順序が整理されている。
- ③ 要点、中心点をはっきりしている。
- ④ 主題や記述の照応(対応)がなされているか。

新たに作成された感情表現力の評価観点(中川 2011)

- ⑤ 学校の飼育動物のことが書かれているか。
- ⑥ 動物への感情が具体的に表現されているか。
- ⑦ 個別の動物の様子を具体的に書いてあるか。
- ⑧ 動物をよく見て、その気持ちを洞察しているか。
- ⑨ 命を感じる記述があるか。
- ⑩ 動物のために積極的に何かしてあげたい気持ちが現れているか。
- ⑪ 飼育活動を通して、友達や先生について共感したり、肯定しているか。

以上のとおり、学年方式の動物飼育活動では、教師が、動物と児童との感情的距離を近づけるよう意図するため、動物への愛着を培った児童は、感情を具体的に表現できたと思われた。また、それを人に伝えるために、文章構成を考えながら作文するという情熱が、より大きかったのだと推測できた。一方、委員会方式の児童たちへの飼育活動の影響は、学年方式群より限られたものだったと言える。

4 学年飼育の子の作文の傾向

動物への感情表現の得点が高い作文の記述には、子どもたちが動物を毎日世話するなかで、個別の動物への愛情を培ってきたことが表れていた。教師の指導により学校ごとのばらつきはあるが、これら思いやりや観察力、行動力

など、様々な飼育の影響による教育的効果を培ったのは、友達と協力しながら日々繰り返される動物の世話と、眺めたり抱いたりして、お互いに気にし合いながらふれあって交流してきた「実体験」だということが読み取れた。

具体的には、最初は臭いや汚れで嫌だった掃除だが、飼育をしている内に労働になれ、また動物が見えてくる。動物の喜びが自分の喜びに感じる。達成感を感じ飼育が好きになる。動物の様子を観察して、その気持ちを推し量る・他者への思いやりを培うことに通じる。動物との接触を楽しむことで、前向きになれる。振り返って、自分を見つめる。などの記述が見られ、愛着のある動物のために喜んで関わっていく変化が見えた。また動物を介在して保護者との交流や他学年との交流が書かれていた。

なお、生命尊重の心については、愛着の湧いた動物に死なれると辛いため、「死なれないように、健康なように」を目標に世話をしていることが作文からわかるが、実際に死を体験した時の「死の認識」と「別れのつらさ」が臨場感あふれる言葉で、如実に書かれていた。そして、愛着のある動物の命への気遣いのあり方や、命を守る自分自身への誇り・自尊感情が構築される様子も書かれ手板。またいくつかの作文には、飼育動物以外の生物の不思議に気づくなど、関心の広まりが見られた。

5 委員会飼育の子の作文の傾向

飼育委員の作文例では、個別の動物の観察や気持ちに関する記述が少ない傾向が見られ、前掲の例文のように学校固有の動物が全く出てこない作文も見られた。従来の飼育委員会活動は、教科に位置づいてないため、運営は子どもたちに任されている場合が多い。子どもたちは、動物飼育の正しい方法も改善点をわからないまま「辛い掃除のみで終わる飼育活動」をする事例も見られる。このような作文には飼育の楽しさが表現されていなかった。我々の体験では、委員会方式の多くの学校では、世話そのものも行き届かない事例が多くみられる。また、子ど

もが疑問点を教師に問い合わせて理由を聞く体制や習慣が見えない作文も多かった。結果、委員会飼育では、興味を掘り下げづらいため、飼育体験そのものが「学校の仕事の一部を消化するにとどまる活動」と考えられる傾向が強いのではないかと考えられる。結果、子どもに有効な影響が見えず、飼育委員会の子どもの作文は、学年飼育の子たちの作文より低く評価されたと考えられる。子どもと動物とのふれあいを通じて得られる心の交流が構築されていないのでは無いかと、思われた。

なお学年飼育は一年間を通して飼育を行うが、委員会飼育は、多くの場合半年でメンバーの入れ替えを行う。これも飼育体験がさまざまな刺激を与えるほどには深まらない大きな理由であろうと考えられた。

6 作文が出来る過程を評価する

内田*³は、作文作成には推敲などの途中の過程が大事だと述べている。また大熊*⁴は、「本来は文章評価の以前に、文章の出来上がるまでの作成過程が評価されなくてはならない。」「作成評価をやらなくて、作品評価だけをしたのでは教育的ではない。」との倉沢の言葉を紹介している。本研究では、完成作品を評価したが、その得点は、作文が作成されるための動物飼育体験のあり方に大きく影響を受けたことが確認された。つまり、飼育活動が学校の教育活動に位置付けられて教師の意図と指導のある学年飼育と、委員会活動として行われ、教師の関与が薄い委員会飼育の子たちの作文には、明らかな得点の差が確認されたが、評価されるべきは、その飼育の与え方にあると言えるだろう。

7 教育的影響を与える動物飼育方法

動物飼育が子どもに影響を与える理由について、日置*⁵は、「心情をとまなう丁寧な動物飼育を行うことで、①実物系の学習として活用（実感を形作る）できる。②心的視点移動の立場から、動物や他の子どもの視点に立って考える訓練になる（心情を形作る）。③子どもと動物の関係性（動物を介在した三項関係）により、

周りの人達との関係改善，コミュニケーション訓練になる。④認知的能力を養う（大事な動物をよく観察する）。などの教育への可能性がある」とし，子どもたちは「大切な動物を守るとい『切実な思い』で必死に問題解決していく」と述べている。また「これらは，子どもがその特定の動物を可愛いと思い，大事な存在と認識することが基本である」と述べている。

30年以上小学校や園の飼育活動を支援してきた筆者は，以前から「心情を伴う丁寧な飼育のための『園学校での動物飼育のあり方』を提言しており，動物飼育活動の年齢に合わせた飼育活動の与え方と，子どもの年齢にあわせた年間の活動教育計画も提示している*6が，実体験から綴られた作文を元に，「子ども達の成長への影響」（図1）も改めて作成したので紹介する*2。

子どもがその動物に愛着をもって初めて，様々な影響があらわれ，感情の醸成，文章を書く力の育成，あるいは将来の子，育てまでつながる可能性が出てくるが，その「愛着」を培うためには最初の飼育導入ガイダンス「動物ふれあい教室」で，動物の体と心を気遣わせながら「心地よい接触」を体験させることが重要である。また，前掲の作文抜粋からも見てとれるように，掃除の辛さが動物を守る喜びになり，作業を工夫し，ともに活動を楽しむようになる時期は，1学期からの「世話とふれあい」を半年間継続して，これらの作文が書かれた2学期

（10月）ごろである。そして3学期には，大事な動物たちの世話を下級生に引き継ぐため，体験してきた活動をまとめて注意点や大事なことを伝える「振り返り」を行う。

学習指導要領解説書生活科編には，「2年間の目当てを持って継続飼育を行う」とあるが，図1に示した最低一年間にわたる一連の流れを学年全体の児童に与えるためには，指導者が教育的目的を持って，「何の動物をどのように飼い，どのように子どもに与えるか」を意図して，動物飼育を教科として体験教育に位置付けることが重要だろう。

*1 中島由佳・中川美穂子・無藤隆. (2011). 学校での動物飼育の適切さが児童の心理的発達に与える影響，日本獣医師会雑誌，64，NO. 3，227-233.

*2 中川美穂子・無藤隆. (2015). 学校動物飼育体験のあり方から見た児童作文の分析，こども環境学研究，第11巻・第3号（通巻32号），24-29.

*3 内田伸子. (1999). 作文産出過程とその発達，シリーズ人間の発達1 子どもと文章・書くこと考えること，財団法人東京大学出版，14-177.

*4 大熊 徹. (1984). 作文の評価，井上尚美・田近洵一・根本正義（編），東京学芸大学公開講座Ⅲ 国語科の評価研究，教育出版，142-153.

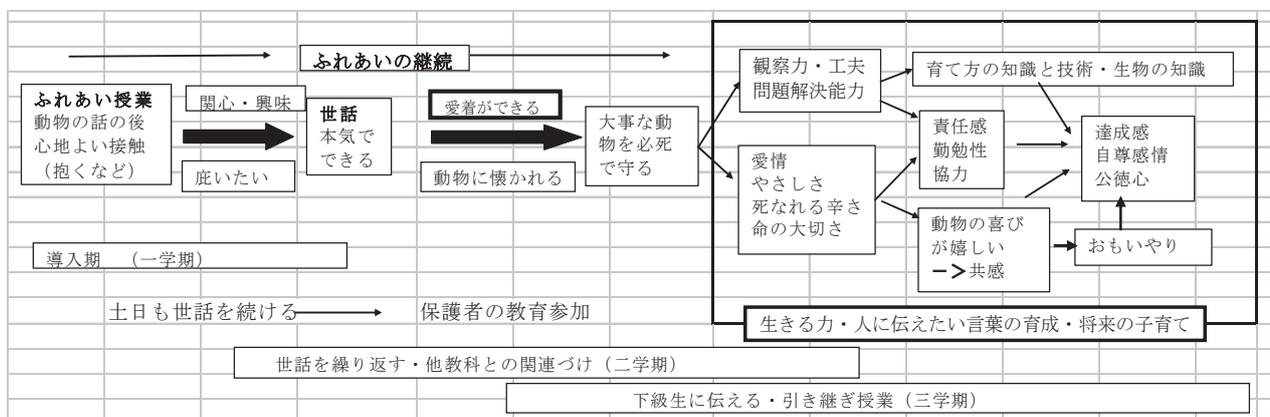


図1) 飼育活動が子どもに与える影響の流れ